



● 巻頭エッセイ Crisis in Japan, Crisis in Communication.....	1
● 勉強会「英語の教え方教室」報告.....	2
・ 第 8 回勉強会.....	2
・ 第 9 回勉強会.....	3

● 授業の玉手箱 「ことばは生きている」.....	4
● 書籍紹介 『金ソソニム—濟州島を愛し、民族教育に生きた在日一世』.....	4
● 編集後記・第 10 回勉強会案内.....	4

巻頭エッセイ

Crisis in Japan, Crisis in Communication

東條 加寿子

大震災から 3 カ月、未曾有の災害は容赦なく日本に試練を与えています。福島原発の放射能漏れの問題は未だ収束の道筋さえ見えず、脱原発を宣言したドイツ、国民投票で原発の是非を問うたイタリアなど、世界規模で次世代のエネルギーをめぐる議論が高まっています。21 世紀初頭、私たちに迫られている原発依存（推進）・脱原発の選択は、農業革命、産業革命、IT 革命に並ぶ人類にとって第 4 の革命、エネルギー革命をもたらすとも言われています。さて、ここでは危機の中で顕在化した日本人のコミュニケーションの問題を考えてみたいと思います。

大震災から 2 週間が経つ 3 月 24 日、米国ワシントン DC の American University であるシンポジウム（注1）が開催されました。タイトルは Japan: Crisis in Communication。これは同大学 School of Communication が主催したもので、パネリストとして折しも滞米中の NHK 記者と日本人大学研究者、及び 2 人の同大教授が参加しました。議論はもっぱら、日本政府と関係当局・関係企業がなぜ放射能漏れについて客観的なデータを適正に開示しないのか、情報操作（controlled message）や情報隠ぺい（withholding information）が行われているのではないかと、日本人ジャーナリストや国民はなぜこのような状況に甘んじているのかということに終始しました。そしてシンポジウムでは、日本のニュース報道は役に立たない（not useful）、危機管理下での日本政府のコミュニケーションは機能不全に陥っている（a communication breakdown）との論調が支配的でした。もともと、これらのニュース報道や発表はもともと日本国内向けのものであり、日本では危機に際して社会秩序の維持が最優先することを勘案すれば、日本におけるメディアの役割は、例えばアメリカにおけるメディアの役割とは本来的に大きく異なるとの文化的考察も示されました。

現に、原発事故に関する日本政府からの情報発信は世界の信頼を失い、私のアメリカ人友人によれば、事故から 2 週間経ったその頃、アメリカ政府はアメリカ国籍の日本滞在者に対して独自の避難勧告を発信したということです。

放射能漏れという深刻な危機の中で、私たち日本人も、政府、関係当局及び関係企業による情報開示の遅れ、情報の二転三転について不信感を持ちました。また、情報の伝わり方についても大きな不

安を感じざるを得ませんでした。日本語・日本文化の特徴として「不安をあおるような」「パニックを引き起こすような」伝え方に対する配慮からでしょうが、婉曲表現が多用され、結局どのような状況なのかを理解できない状況が続いています。「ただちに～ない」は安全表現でしょうか、危険表現でしょうか。特に、災害や危機に際しては「わかりやすく説明できるコミュニケーションの専門家が必要だが、こうした人材がいない」（産経新聞 4 月 20 日）ことを、私たちは今回身をもって体験しています。ここに日本人のコミュニケーション・スタイルの問題点があります。そして、この日本式コミュニケーション・スタイルは世界で通用しないことが、今回ははっきりとわかったと言えます。

さて、日本人にとって英語は長い間、外国の情報を日本が得る一つの手段であったと言えるでしょう。外国の書物を読み、外国の人に耳を傾け、英語を通して日本は多くの知識を吸収してきました。やがて人々の流動性が高まり、日本人が海外に出て行くようになって、英語で積極的に自己表現することが必要になってきました。そこで、英語によるコミュニケーション能力や意思疎通を図ろうとする積極的な態度が求められるようになったことは言うまでもありません。そして今回、震災や原発事故に関する日本発の英語情報が圧倒的に不足していると批判されていますが、裏を返せば、世界が日本からの情報発信を強く求めていると言えるでしょう。

このように、グローバル化した現在、日本人にとっての英語は確実にその意味合いが深化しています。そして、日本人のコミュニケーションの問題は、今や日本だけの問題に留まらず世界が注視していることを、奇しくも今回の大災害が教えています。

おわりに、英語は言葉。言葉は希望を紡ぐことができます。復興への祈りに代えて、英語でどのように希望を結ぶことができるのかをみなさんと一緒に考えてみたいと思います。

（注1）

American University が制作し Web 上で公開している LINK TV のプログラムとして以下のサイトで見ることができる。

<http://www.linktv.org/programs/japan-crisis-in-communication-panel>